

山の平地平線で見ることがブレイリー

ーでは多いが他では山や丘が見え、視界がさげられる。しかし、カナダの中心都市は、国土の一方に偏在しているのが、カナダの国内旅行は距離をとれないがちなのである。主要都市がみなウィニペグ辺にあり、カナダの地理に関する本がみなそこで出されたら、少なくともカナダの広さについての心理的感覚は違ったものになったに違いない。(筑波大学教授)

## フランス系カナダ文学 興味深い未開拓研究分野

西本 晃 二



「カナダが英仏両語を公用語として、多言語国家であるということは、日本でも近年、ケベックの独立運動があったことも手伝って、以前よりよほどよく知られるようになってきています。それでもパーティーなどで、私が英語でなくてフランス語で話しているところへ、日本の方が来られ、『お国はどこですか?』と聞かれる。『カナダ人です』と答えると、『アレツ』という顔をされ、『そつそつ、カナダではフランス語も話すんでしたね』という返事が返ってくるのがよくありますね。これは、筆者がよく知っているフランス系カナダ人の学者の言葉であ

る。

カナダにおけるフランス系社会の地位について、それも日本に限らず、広く一般にもたれていく認識を、右の言葉は端的に表わしている。すなわち、いつもは忘れられているが、何か機会があると思いついてもらえらる程度だということである。

たしかにフランス系カナダは、その内向的——日本も、その点では、開国までは完全に閉鎖的であった——な性格の故に、長い間、北アメリカ、いなカナダの文化や社会の中でさえも、自己の存在を主張したり、他に強い影響を及ぼしたりする度合いは少なかったかも知れない。それも北アメリカにヨーロッパからの本格的な接触が始まった十六世紀前半から、アメリカの独立戦争の結果、独立に同調し得ない植民地の忠誠派が、上部カナダ(オンタリオ)に移住する十八世紀末まで、二世紀半にわたって、カナダで人口的に圧倒的多数を占めていたにもかかわらずである。

しかし英領編入以後二世紀半を経た今日、十六世紀大航海の時代にフランスが獲得した海外植民地のほとんどが、合衆国南部のルイジアナまで含めて消滅してしまつたのに、ケベックからアカディアの故地(現右のノヴァ・スコシア、ニュー・ブランズウィック)にかけてのみ、フランス系の言語と文化、社会が、いろいろな圧迫に耐えて生き残つたのは、すでにそれ自身が、一個の目覚ましい現象である。いわんや近年、「静かな革命」や過

激行動を経て、政治的独立運動を展開する

など、フランス系とはいってもヨーロッパのフランスからは独立し、またカナダの一員といつても英語系とは別の途を切り拓いて行こうという意欲が、政治・経済・言語といった実際のな面ばかりではなく、文学や芸術にいたるまで、社会のあらゆる分野で活発に表明されたこととなつて、まさに興味津津たる未開拓の研究領域である。ジャック・カルチエからフィリップ・オーベル・ド・ガスベ、ランゲからガブリエル・ロワ、アンヌ・エベルからアントワヌ・マイエまで、フランス系カナダ文学の諸作品を読むと、カナダ東部に根を下ろした社会を護りつづけて行つた人々の息づかいが伝わってくる。(東京大学教授)

## 政治経済学・政治社会学

### 政治・経済の根本過程に焦点

ケネス・S・カーティス



政治的、経済的経験の底流をなす根本的プロセスの分析が、私の主たる研究テーマである。大学教師になつて以来、私の研究は政治経済学および政治社会学の領域に集中している。

政治経済学の分野では、一九八一年、私は経済的条件と社会的条件が合致した地点で発生し、そこで産業政策が形成さ

れる政策空間を構成する枠組の研究に取リかかった。この研究は、理論、経験、分析の三段階に分かれており、現在は理論的段階、すなわち産業政策に不可欠な戦略的環境の二つの重要側面——経済的競争の側面と社会・政治的、対立的側面——の性質と形を研究しているところである。この二つの重要側面(領域)の特徴として、二つのはっきりと相異なる意思決定および資源分配モデルが考えられる。

この研究の第二段階では、経験的データに基づき、国有部門、規制部門、競争部門という三つの主要経済部門について産業政策に表われた戦略的利害に対する認識を分析するつもりである。第三段階では、産業政策策定に特徴的な経済的、社会、政治的トレードオフの過程を調べる。これはカナダと日本の異なつた経験を主要テーマとする比較研究となる。

政治社会学の分野では、ここ十年以上カナダにおける政治文化の基盤に関する研究をしている。たとえばナショナル・アイデンティティの発展と感情、ナショナル・アイデンティティの構造と内容、ナショナルリズム(特にフランス系ケベックにおけるそれ)のさまざまな要素の出現に関する分析を行なつてきた。

現在、カナダの政治文化が収れんする二つの側面、すなわち、政治的論考のパターンの発展と深刻な経済危機時における政治権力への集团的服従の維持、について分析を進めている。(ラバル大学教授、在日カナダ研究講座担当客員教授)